

## 新田先生のこと

「終わるもんですね」

この言葉は、毎年卒業論文・修士論文口述試験の終わる二月十日頃、必ず新田英治先生の口から語られてきた。

十二月二十日に卒業論文が提出され、一月十日に修士論文が加わって、私も教師は、それぞれ四〇本前後の論文を、一月末から始まる口述試験までに読了しなければならないという、教師にとっての魔の季節を毎年過ごす。学生諸君はつらい思いの末に論文を提出して、一足先にほっとしているのだが、教師はそこから苦しみが始まる。提出論文の一字一字に訂正を加えながら、丁寧に読み進めるには、大層な時間が掛かる。正月をはさんだ一と月余りの限られた時間内に、それほど論文を読み了るには、睡眠時間をけずっての体力勝負となる。かつて赴任一年目の魔の季節に風邪をこじらせた私は、一段落ついた頃に十円玉大の円形脱毛症を頭頂部に発見したのも、人にはおかしい自分には哀しい思い出である。(今はもう回復している。念のため。)

論文全体の三分の一ほどを読み進めた頃、もはや息切れが始まる

## 高 埜 利 彦

と、新田先生のばやきに似た「終わるんでしょかね」という不安のつぶやきが聞かれるようになる。それからさらに一週間くらいたつと、次の壁に突き当り「大丈夫でしょうか」という危惧の声がもたされる。かくして何とかすべての論文を読了したあと、いよいよ朝十時から夕方六〜七時まで、一週間毎日口述試験が続けられ、とうとう無事に口述試験が終わると、新田先生は感慨深げに「終わるもんですね」と、ほっと一言。我々一同うなずく。

いつの間に、輝きのある白髪になったのだろう。新田先生に初めて出会ったのは、私が二十六歳、先生が四十五〜六歳の頃で、髪型は今と変わりはないが、もちろん緑の黒髪。カバンを手提げ、真すぐ前を向いて、やや大股に姿勢よくグイグイ前に進む姿であった。四半世紀前に本郷通りを歩いていた姿勢は今も変わりはないが、速度はやや遅くなったように思う。史料編纂所に入って間もないその頃の私は、編纂所を支える中堅の大先輩である新田先生を、歩く姿勢から想像して、謹厳実直金兜のお人柄と思っていた。

ある時、後楽園球場の切符を数枚入手した私は、熱烈な巨人軍ファンのT先輩を誘ったところ、余分にもう一枚切符を所望された。当日、球場のTさんの隣りの席に現われたのは新田先生であった。巨人戦の試合内容はまったく覚えていないが、そんな時にも、先生はビールを飲むこともなく、歩く時と同様に狭い席に姿勢を崩すこととはなかった。だから、背広の上着の前ボタンをいつもはずすことのない新田先生の謹厳なイメージは、私の中で不動のものになっていった。

くだんのT先輩は、史料編纂所で真夜中まで（正確には早期）仕事をされる分、昼間はあちらの部屋こちらの部屋を訪れて、情報を提供したり、仕入れたりの生活ぶりであった。そんなTさんが提供する、昼休みの東大正門前の喫茶店情報には興味深いものがあった。古代史や中世史の先生方の食後のコーヒーを楽しみながらの語らいを伝えるTさん情報に登場する新田先生は、あの精悍に歩く姿とはまったく別の、ユーモア溢れる、というよりは子猫に紐を使ってじやれさせ、挙句に子猫の爪に手首をかかされると、あわててあやまるといった印象であった。いや、これはその後の観察からの印象も加わっているかも知れない。

新田先生と私は、前後して目白に職場が移り、それまで以上に身近に接する機会が増え、私には三つ目の発見があった。卒論・修論を読み進める際、先生は誤字を見出すと、必ずその訂正を巨念に入れられる。誤字というのは、ひとたび誤って覚え込んでしまったために発生するものだから、その文字が用いられるたびに誤字が起こることにもなる。私は、二つ目の同一誤字の箇所で「以下同様」

と記して、その後の誤字にはもう訂正を加えない。しかし新田先生は、すべての誤字に最後まで、訂正を加えられる。多年にわたる『大日本史料』の厳密な編纂が習性となったためばかりではない。この懇切な指導は、実は先生の学生指導の随所に見出される。さらにその根元には、新田先生の優しき、暖かさに行き当たると、学生・院生に対する難しい会議を行なう中で、先生のうさぎのように優しいお人柄に何度触れたことか。とくにこの十一年間の学習院大学でのお付き合いを通して、優しさが人を救う、ということを学ばせて頂いた。

それにしても、今年（一九九八）二月の口述試験を最後に「終わるもんですね」の新田先生の言葉は、終わってしまったのですね。